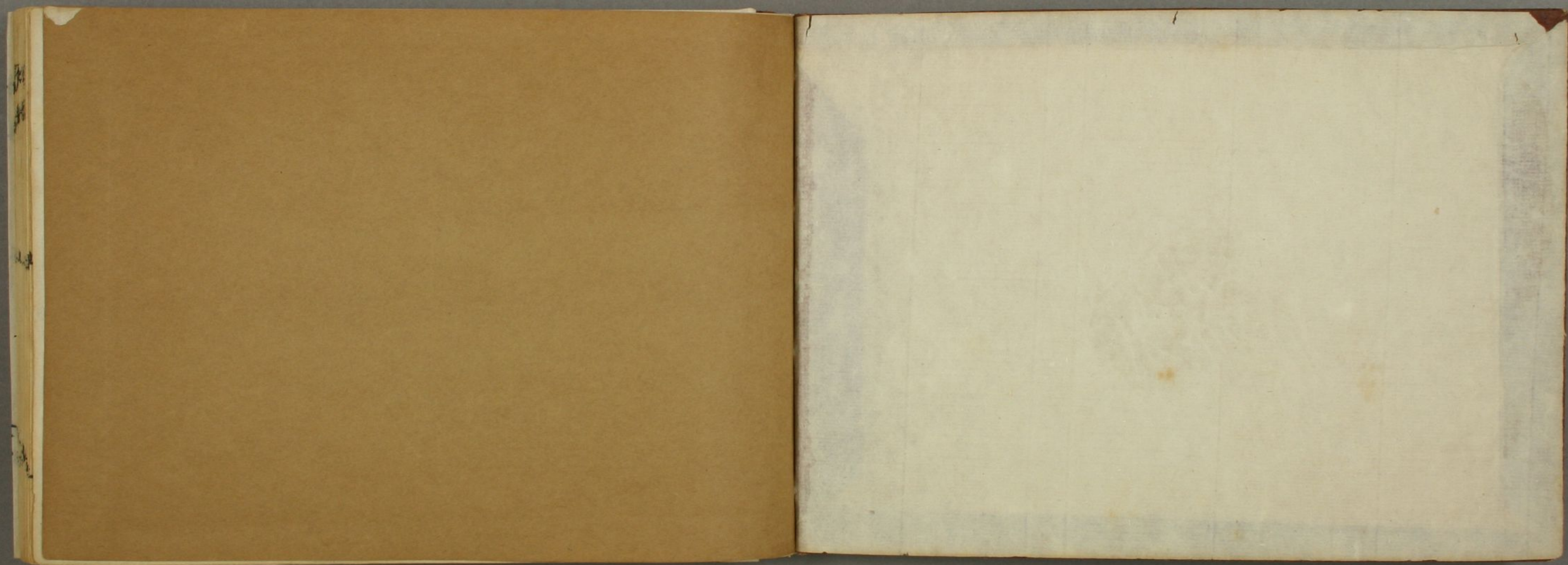
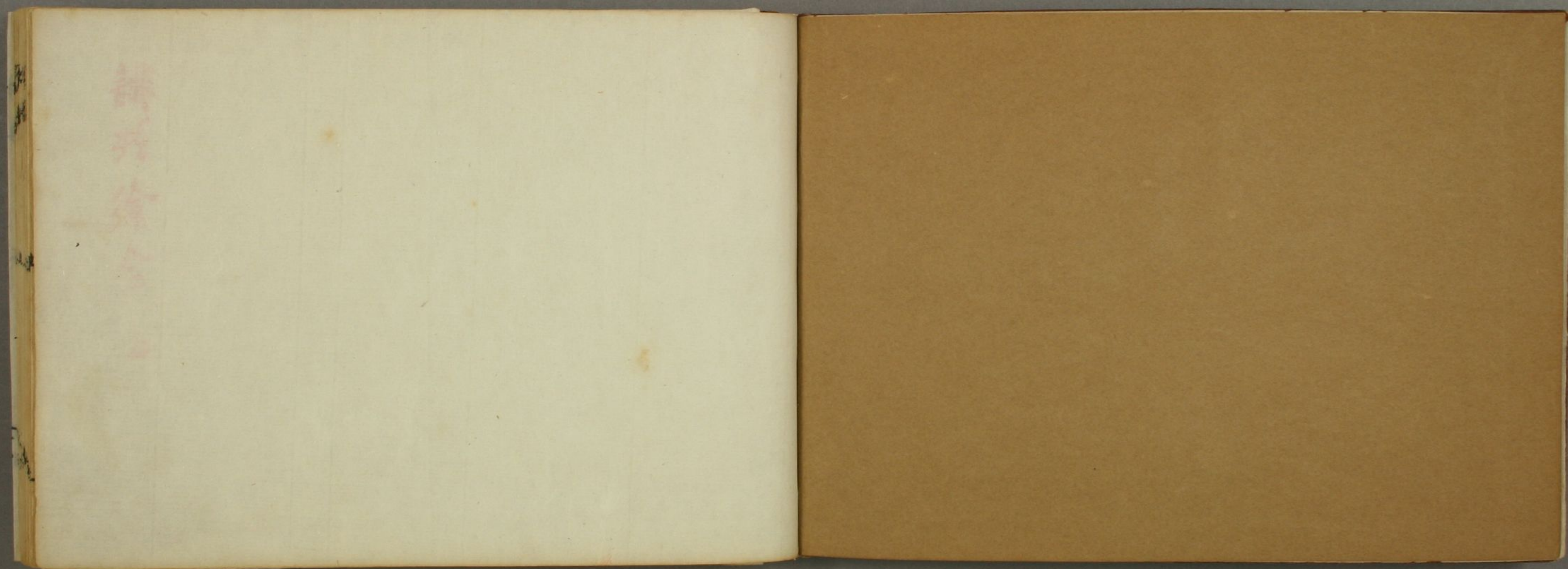




中村俊定文庫
文庫 18
78







誦
始
繪
合
上



一上には志をくみ梓能信
 の連龍中真何は師何
 武とやんは口は利ひ海と
 和めてせとれまにほいと
 是利一より先中を無有の
 玉句海一と信く忠まを
 何とぬと今むたを〜に
 是と乃ともなつる古めら
 大又難や厚つむ下宿ひと
 心りたりしきと抑も年と
 拾い集るるゆふとよの句

咲きた花をそよ風しをり
 自夜に雪封か相くし一浪
 柳よつと風をのりてまき
 うしはるの檀芝瑤々竹
 子時をうらそを婦むし
 荏やあやしき志わら
 くしやかゆし一任は白臺
 う山水とやいそんとあつ
 奇々胡春の華華々々
 花宿女極彩色をみるか
 やしあまやあま(て
 うのやいやうやう味を
 刺安忠の徳馬つくしあ
 事やいそく独んそたの
 しむと衆とみてきり
 母をいつまのたのしむ
 わ素たぐすもはて持よ
 彫めさるゑな顔百豹を
 と綴りてうんと彼好出達
 りしちなるとむを婦
 あ新屋

流下佳

若野君氏高政

中村俊定文庫



後長女院御所様御出亦初ましく
照の山を園をせかりはりしと
下るるなり赤い糸の白
とまうけ百約御の思ひ仲あふし

一囊軒

貞室

暖の敷慮をま〜秋の山
のわろおき了れを秋を玉階
雲分晴る軒端の風鈴をさそ
さあゆをとりや月のかきかこ
つ糸もおね掛の場はめよりり
砂地乃わつげ流を夕暮
糸糸花中枝川波りをん
朽縄まのせい海々糸綱の手

炬形乃新かかやりや月園
宿りりり急く様おれ
志お紙の後因風を打る
冬もむさある長保そら
山玉の御個あはかり
よわらる勝いふわら
さねそのれ裳をかけ風を入
校うちて月の人あはれ
孫と一ひろお村様
あかふ月山お持りり
表あらおんれ里の款
雲ふよこれ一清乃洗濯
海とたく安んをと嗜
若れようんまとかそてやま

眺鏡ははいてもいそぬ
たむひまはまの朝山寺
ことくおははつらんに
日名れお薬少りま
不審なるお海草の
雲井よはにんく
人はむ天物の鼻
よくとこあひて
百日れたてお
大進およ六國乃者
おろそれ倍とり
孫もおれも志り
面白く名おの
志一くおもふ

願
に

後心遠くして花奴よれ
顔とくつりあふ^くまを
おしめれ冠とてよれ物なり
かきけつていよと森くさる
花よとて村我より啼き
垣根は流石より見ればり
水はさふおそき橋かき守
山川あふくさるをよ橋
後身をも念ふと殿は後そや
田面の層いこしとよほく
みよおれとて海さる好む
月いちろめくすの雲気
明星をねむ山は花よれく
茶屋よ清く火の氣を暖め
ついでうたの音鳴拂お春はね
遊初れ鞠よれをやまき
梅の枝葉にけりこいんて
雨しよわけぬる霧の氣水
言陽よほいんやうねん
餅とねむるはれ名月
産金よと山をの代身よ
羅騎の衣よ青くさうと
丹塗いよる居およりと遠かり
そいゆく猫乃いじやうやか
かまうた白や社おあつらん
まがいのふおあせし人
藤おある房を清く山の赤
お紫持よとけそあ麻く

梅屋
上
七

射野を秋の初夜行き
一月より見るや七浦九月
秋晴る秋夜星のほろけ心
氣のまろくし紅方あかしあかは
舞をねかほれぬいしし
密風ひましく体息う今方歳
口銀も正月比の門かどを
せち振舞や打後さん
長弟にさあや唐子秋子中
うひやとふ交葉まるをば
とんこ葉にほもあはれ
け若れらちよあよあ弱あます
のあそりも過りいあんあの瑞
揚られあせとねるあ

筋はよみよしと我切つめ
幼を習たりかあなりあり
袖とちとあしあるあるある
系良刀光服流人あとあ
仲徳もそ腕あ中あをあ入あれ
海を定ていしあるあ中
よあはれとあるあとあるあるある
糸あのあれあうあ丹あといあん
雲母とさありくあとあるある
白き扇の地わひあ濃あり
ちかくととあるあのあれあ
飯粒の後は汗あかありし
まおとあれあ神あのあ月あは
鏡あはあをあしあるあるある

梅庄

大徳おろせし秋の泊舟
吹て来はらふ浪津たぎ風
小山かこつるも 縣をさうや
人の信絶いりて何とせ
かゝ意地お目送末沙をじ
所念佛こくりりー明を
花よあにせりたるも 春を
契久しけ十年日春

城氏
元長

よふ一夜星はあふと後家やま冥
よまゝのさよふこ返りぬる月
紅葉と焼は枯ちりさうん
暮に忍びりりりけ度り記
あふもも田舎そらわ志こが志こ
あしとあらとく牛跡まきくそ
あまゝおたなましおるれ市ハ市
あつと一是さいふあふあー

紙片
止

船迄も多くと眺むさうかく
意れさほふよかむ勢興ロウキ
宿世とて一二冬あかこかの
さかあすすたてこ味縁
うとゆや荷ひ糸糸糸巻糸
当も用帳秘佛具寶
瘡案よきりて覺何事はり
月解よ行成老顔
相敬や衆家此花ひらば
抄ひんらら友にりこり
手話風すかいはは兒老信
筋川矢又よほもともかく
花の言ひんめわらね神のう
南せにささるらわいのま

あやじかふむ山宿のさう坂
波系八十洲川にじもあ
惠このお御後ねと空にいて
備く目おとん今今せいの
枕刀と家またらち愛うら
是那よいとあ今宵定よ
らうとよれあまはそ智る白蛇笑
せんやとよはれおらるゝ意や
てんわにいとくまをちく海
投ぬお鏡よころまけ服
子もりも余前よ乃成ナリ立路
地就とく此と名子孫斗利
舟道とよさ米桶子枯老志
多りとりとを送るわさか

紙片 止

とちまたよきし甲斐の松の風
流利の血氣ははつきり
夜は福らふかた鏡舟はら
ひはまほしき磯かみ其う
先子んまむむ遍路の足阿し
こゆりそりなぐれ松を
一人の傳受奥儀安かす
彼三多を身やみる人
水初や名よふ家もそは
まくれこまぬあけり月
は猶ほ星手拭も露も
霧乃よ草履杖はけす
さく花も香も知らぬ
東風吹ぬふ南園とんち

及ぬと我はふる急を
いづく腕をひくそ
友独ふけはそ分は
神多はるるあそは
はらだそ詞の末はそ
とのまにゆひなま
阿あひ志るるあそ
るるいれせや絶ぬ
あひ野もうさふ
茶籠は志るにそ
方そのの松あけり
そこそ空穿人別
まけ太刀あけり
尾也も余所を拓く

枕
止

珊瑚珠の色にそとより紅い
さへよおのひのひの紅の毒
誰とそと何ぞ思根たはし
浮定門とありより
かたひが統法のうち一寐
兼舟よ兼ふり大津松平
割はきの及つ事とそと月深
仕物より倫ふ氷はあし
かよりり取れ親控を山家
兼生より身もたれ石風呂
思ひあ月比ねをこ宗のかり
名をとも天下にゆる合此兼
本やつとやう花と兼は用本
く兼や兼のこらひ縄を死

加でより 兼れ越兼子あるる

海風といとかとよあし

目さつあつと兼は兼兼人

あつあつなりそけむ兼利

るる兼やわんれかあ兼時

兼子兼兼のいけう兼し

あつへー一兼兼小兼公

法兼ありれ水衣と兼ぬ

兼しに兼と兼は兼兼の兼

同兼むくして兼あつか

兼の兼は兼兼兼兼兼

兼よ兼兼兼兼兼の兼

兼兼乃兼兼兼兼兼兼

兼よこ兼兼兼兼兼兼

兼
兼
兼

まゝの御前此はくまを
歸元何蒼禪門大位
隠居子十百其目を愛れ
まはりの揚をふん食小居
名をなすは来れむ今一洞川
負那の意成波とそわを
愛ゆひわおふふわわ飛空
祝徑相骨志れふ夕一園
おろ乃久は世の詩人さ摩踊
おまゝ。ちるはまを持の家
お格をれまの月も恩院
まおんをあふく後書まあり
おまゝんをむふも風長は
生美一も記を取るまゝ

春北雨何中亭防淋一いり
居眠甲物中たまに化物
大蠟燭列座のひん清まより
物事こころしことそ起りぬ
てのちあゝ益人いんせん
それ時これ時わづはまに
病わづるそそをなれはこれ
内儀の君一も 枝投も
まゝんはまにまを扇をふ
ほのくくもあふ又條松堂
まの山をなすもふまの月
二十三巻紙乃の上を
水入る花のそふく散乱ま
松よやまのこころのそ

第知
上
吉

今銀の古是枕若はかゝく
お茶一二好くまゝの心家
勝つる編笠あつて志はし
さゝり捨てゆく下女
かまふ余不目とほむてい
まとの世志くも羽敵は末
大魔王件ののりいせとてぬ
拂子のさけり風はゆき
親とるやや昔風来たら燗
わさおれ病きえて合時
水神の日鏡とほふたれ秋
思ひのこゝろ月迷いふ
いてやげ花火は今宵ぬけま
に戸よおわくは女あり

業態をくおくゆく侍る町
誰振家中誰番乃宿
奥より地味よりはを表はぬ
川わけて森を流す風はり
假枕ひと羽織とぬき捨て
あらはれまに自討ひひりぬ
やあはく足音わじし桑相者
習ひてのそく降子にやぬき
佛菩薩定てあ方海世も
とこ縁の都人き業阿保
ねはあを孫らちいけはてん
ぬりこころえと幕はるる
借よりや月ほしたはひ舟
無存けあなまゝ(露は)

此
此

打揚技神乃林方ひり家
小枝一打乃ふふり香
ひり家かたにひり家者
むりーむり神ね精進目也
負軍かひりて曰大くはき
義朝親子徳田金玉
堂灯籠ひり家とひり家
あきり月下れ門録まひり
宮内みのり指のひり家袋
銭序店小炭薪あり
小橋より録めれ家乃貴芝居
かたにひり家ひり家持ん
むり家信綱式乃興の立りり
むり家ひり家装束神れあえ

春の巻はあきりむり神
不形成就といひり家ひり家
誓志く何一方石れ國の守
紙小のひり家ひり家
門小ひり家ひり家
うりきんといひり家ひり家
それひり家ひり家ひり家
かひり家のひり家ひり家
歴ひり家ひり家ひり家
るんてひり家ひり家
後録小ひり家ひり家
をひり家中ひり家ひり家
餅ひり家ひり家ひり家
信肌ぬひり家ひり家

春の巻
ひり家

任那屋の石よりいかにまはひき
あまこれ火乃正女うかりは
牧野今をうけつたぬえ乱舞奈
世帯やぬりせりぬぬん
あまう洞志海乳房たたり
こはまかこの父より
花は文武はれ家れ意用者
唐同まもや日根園の梅

一掃齋
了味

花ちりて小首を抱ふゆへに
破袴は花よとれてしき
旅衣の肩に横かすませそ
志すそく即にはいふ名不
ぬほしむつむ基れ上取ぬ
今日は唐方に向えんけりてふ
校打の夕月月る菊はせり
そればかりしあまはれ

上
十七

萬葉の昔の萬葉立のかり
 すのふさほそりゆく秋風
 天は丁糸極道啼鈴を
 五條川原れ末乃日島
 うそくす死儀とつらき歌
 水子溺きし死體身人
 となくや山家谷小島
 徳病風や誘ふ城中
 眉目うきと送るいふ美因
 洞か勝る馬れ結つ不
 せ盗し今いの雨は悔道
 社檀乃下に念仲れ声
 今にも似る稲荷まつしあ
 月あまのこもあまのこ

加ふれお歌の紅葉あふつき
 別ききはさひひ余りれ霧
 血と色さるるの底をさるし
 は侍のわい何々あふるい
 納むる開東紙一はく
 何々昔根乃寺の月看
 三件よいけし日向堂其れ
 志るひし橋ま言日る月ふ
 清まよりみ本太れ方な
 鐘こら響るけ町乃出まられ
 ちりくくに又あし送りま
 るよりああたる目のうち
 まるがまをれり月あまらる
 若れまらぬま波のはる方

大熱氣出たふふふ
何まるもさる月とん
寤寐の初秋の静
志る寄しはく山片
家の子いふは
神をくく四くわ
さるふふふふ
人と起まる静う
物子来打きけ
禅堂あく己り
経鋪一唐ふ
つふふふふふ
何んふふふふ
汲みふふふ

号はふふふ
静氣なふふ
そらふふふ
静白ふふふ
おふふふ
大右と那寺
法眼三回
さるり月を
端と知
静をも
長は
草履
ぬり
ち

上

門下子孫生るる心とありて
押付わさし奉りし人そと
は世先とあ後の世に世に
只のわがとて花子明と終
二三月さりのおまゝうわ
遊つてあまうと何所序
を遊しあまうと一夜
とあまうとあまうとあ

大坂

宗因

はうきふ杯杯杯杯杯杯杯杯杯杯
みそ月う川乃波のそそ
友子そあまうとあまうと
子そあまうとあまうと
地不ねあまうとあまうと
はうきうあまうとあまうと
一舞あまうとあまうと
あまうとあまうとあまうと

宗因

上

七

わ福娘以てそのは初をみり
延寶元年冬念れ少く
何ふか孝のほか他又夏に
と後出さきぬものおかし
町四のせと記んぬひいふ
一乃ま申れ好のゆふ常
の縁くも時をいはず飛飛に
申月をそとけ月の下水
わ事さういとやまの半周舟
荷物おる記かをいふいふ
焼七といふかを物家計之
いばくも同一江戸の柳棚
花まのむ法ある情向所れ池
舟将の志を是まきれう張

いこ道もいふ事ありと飛た様
太刀とつと合てさううつら
ふぬとゆふ上上ちやうじら
賤ちやうじら言あきく暇をぬりな事
ゆぬれはくもと後夏に世し
未一候よなれらむいれ言
いふさうか事かち花まをさ
りまの即病れ世乃中
命なきと道は清を月れ言
ト知しといふくさせやく
又た節又出く舟おとせん
川東おあ同登なるとん
縁をいふは事津乃るか
いふる満運又のかよひ路

宗田 世

君うあしり是かかしくおき所
又のいさうん乗物そは
は右後や三日中此の言
祝せたいふあありまぬ
同しく大天此に願回さん
是う言托乃た世とこの書
死言た入自志いさう一
やうとありい龍以千人あり
身言してはさうこかるた念や
酒め合とそそく好うあり
ひり信よるほひ身家月止り
いり好やうとあまきか
花のそお村もあ履しを好言
そ信尋るるあまきとそまき

河津書田子ねいそがむん
うちあまの念流紙は
さうお社の系たそ二三行
う酒は一日のし
乃と紙りはあお事そ月終
こまやをそとり中をう日ま
そ禁福とうとまあま中
船と際とのあゝ破乃あ
やうくそお此内をそ好お
都とそそあうこ
栗田に所とあうい道
一わあああ大あひあり
乱拍子湯未毛志はありぬん
櫓うまそやあそくわあ家形人

殿風面をむくは^紅やうそあは
 一時女房下ししはいた
 忘れて守^紅念くは^紅了^紅船朝
 各一^紅下^紅し^紅ね^紅く^紅は^紅あ^紅く^紅。
 木下には花指藉^紅る^紅醉^紅。
 月^紅の^紅波^紅陽^紅を^紅陽^紅を^紅う^紅く^紅。
 夕^紅夜^紅さ^紅く^紅活^紅水^紅れ^紅あ^紅い^紅り^紅よ^紅か
 ひ^紅海^紅を^紅せ^紅ぬ^紅も^紅う^紅花^紅山^紅の^紅り^紅。
 そ^紅ら^紅く^紅と^紅る^紅采^紅花^紅推^紅と^紅の^紅あ
 わ^紅月^紅の^紅こ^紅を^紅そ^紅あ^紅う^紅橋^紅此^紅園
 け^紅り^紅と^紅く^紅な^紅る^紅月^紅は^紅は
 解^紅不^紅あ^紅や^紅ら^紅ぬ^紅も^紅う^紅と^紅も^紅く
 ぬ^紅ち^紅の^紅を^紅あ^紅や^紅う^紅と^紅せ^紅す^紅。
 古^紅来^紅秘^紅あ^紅る^紅子^紅外^紅よ^紅こ^紅に^紅け
 ち^紅り^紅く^紅や^紅足^紅柄^紅若^紅松^紅打^紅さ^紅く
 わ^紅け^紅の^紅女^紅を^紅ら^紅ん^紅糸^紅の^紅後^紅。
 我^紅を^紅を^紅こ^紅ら^紅に^紅つ^紅き^紅米^紅三^紅米^紅。
 船^紅を^紅り^紅船^紅とい^紅き^紅い^紅も^紅ん
 山^紅又^紅し^紅や^紅あ^紅り^紅を^紅し^紅山^紅花^紅草
 白^紅花^紅の^紅あ^紅ら^紅う^紅が^紅一^紅花^紅の^紅り
 物^紅と^紅は^紅世^紅風^紅林^紅の^紅あ^紅ら^紅う^紅は^紅ま^紅。
 よ^紅り^紅と^紅は^紅葉^紅乃^紅は^紅月^紅を^紅あ^紅ら^紅う^紅。
 山^紅東^紅の^紅の^紅月^紅の^紅の^紅海^紅を^紅あ^紅ら^紅う^紅。
 海^紅方^紅里^紅長^紅倚^紅此^紅沖
 宗^紅乃^紅忽^紅風^紅の^紅あ^紅ら^紅う^紅は^紅ま^紅。
 取^紅毒^紅教^紅の^紅あ^紅ら^紅う^紅は^紅ま^紅。
 唐^紅宗^紅の^紅あ^紅ら^紅う^紅は^紅ま^紅。
 花^紅た^紅つ^紅子^紅の^紅あ^紅ら^紅う^紅は^紅ま^紅。

上
 下

先日の花をゆりて山キ
を形しよるる三月三日
雪も居眠りといふは
日の君が乳を消きり
暦も種前より一冊はし
去るらんぞやまをば
熊一串や金にたたり
流し寺後めくく

武畏

正徳

少やふ花無乃を何と云
村ぬくく唯我獨存
上世月老年好子新瑞月
誓り何れぬ遠く考か
船寄は立夜を添とら
東海南水舟一そたふ
まひりしは海軍三軍
肌下流を一とるは

正徳

上

十四

依一節を以てかゝる神
指文の字種をひそめん中
寺種とい打海は家海川
親くおわ字ともいふ
系宗阿より表借登お許借や
こ信にほふふ不かぬを浦
舟をたるはてきたら相
葉おれ訂の月くぼらん
打干はる又月の親の取
神をまある異なり
そ方病とけい今幾ふひ
おれけぬお書おる本物
は計いぬ不意用め
物即かりて何れなる

中々おけてもおとこしん
まの御宗脈いふとくす
ぬとてええんれま書葉
ありを御宗おの書は日
御宗よりはては生と今定七
先祖の塚の友のとおころ
南寺出天御宗書控野珠也
片種ぬす本宗れあさ衣
る何とおひまはし急わりの
名宗の御宗あさ首長
借鏡乃測いゆるぬ取丸
のて形ありぬわいし
賭祿八月も照鏡いすよみ
辻と傷くやらぬおより子

上
上

次郎あまをくぬ夢多かり
紙屑ひらふ長し行ひし
解り乃そをさるる火輪中
床元の枕さくぬうたん
沸しはをちかす有山株粒
二ッ宮のち小め孫中坊
氣苦小すまふ時合れ玉
解はを解へしときを産所
精をそ登るれば乃一和業
おかしくも月よ三折れま云
位不動それ物さるあふ
く代坂離れ身れひゆると
松本ま経給ふ人ぬわ水
正徳六錫水くくを花守

い裁件許日七かふる事と取捨い
水海加む町あまうい
我々を法に換り譲ぬ
者ふらなるもはるす
丹波のまの村なそこらに
かいらひく血もやむ助を
男氣とほじあそれ一昔
かこりりすくもひひ除
あられぬる家た忘れたる春
今いく日わぬぬ菜摘へ
飢渇もを腹も浦もを瘦
佛を園あつたふしあ
はとせんとくとせぬ胸の月
あまを枕とんやひり床

五
七
七

急げしあふけのあやう煖く
世界よなきあふをきしの中
延びた玉の臺に所細物
雲東へいよるひくぬあし
は東に花よりとうむさうけが
数葉よあらんぬ句とあはけ
倉降子着やう座敷の成仕切
何村うむしうあるは友並
鎮はくみ腕お立ちあき道
凡そ家となる秋の村ら猶
月お人よ柝横の物雜名下
お祭具あり通天庵橋
空ハ今とれりおまふ海花
海もやをたうす茶一少く

用やうと後まのひひいよ
えいあれよとてとらえたるは
敵をのきあはしとゆかりを
かきと城乃文字い志とま
四方秋意にして後秋意と
笈おかじかありうとまぬ
柝振書とわ月とも出落書
うすうれあはしそあま書凡
去既双を後と信て餅とれぬ
かうれいあり一 東東海河
志とんいん籍と百そと氣熱
秋就まを家とま娘はから
昔人月れ九月のいまるんり
高や何めくは十の秋

世にいふ事なき心は勿論そ
空を鏡よりともみ物れりさ
法に在るが如くありの境を
甲乙を志しありしれり
はるるを控報うるは道
かくて出難を考むるは
東山花子一巻の目録に
去る萬葉集の境界

雷尾氏
似船

給ふ羽む頭水面西うき世
二十余年も去る夜の夏
朧月表記より明そめて
え形一のまゝに描かぬを
たむよむるまゝにつるん
習文の今こそせと名先行事
米東町の石と筆の法
十が九川吹ん風

33
上

耳候まのやびり一節公
わりの豆腐にのこは村五
阿地乃くしうりちる純純家
秋風寸そふ証鼓一せの
奉加おく臺聖後光十月れを
ねの紫うーれ株門の陰
檀那まのちおす風勢念遠
淨琉璃はうしうんんん
二条通系極の念やまひん
山九の王吾御幸町筋
わて承るしえれせん文使
何やうるれも仔細念念病
紙りりめん下苦ゆんれんを
つこしういしう界のぬん

丹さかりごうや灰ちなご盡
いごらよとれん後をぶれ遠
雪を風復志のひまふ統りし
凡ひふよをえちまうり志を
腹痛者たごごがとをふし
たうすひの系れうこくク等
月氣をとと系はまこ系系陸
お方よりつごおよりこよれ各
あすはた天気志う此屋念に
海中あぬかりりねを
曆ううわ弁おたを君細
ひろふとろても降を一月
かやをれあうこふん脈はら
ふんこ地文いんご

33
17

佐平見物人おぼわつは男
をんまん志より軍法しほのり
数年舟中堂に冬人々念ねんの
不形成就年ねん日去日
そむひききおぼれ花を名な好す
炉地ろは落おつ入札いりの夢
海石うのひまも常下じょうきの道
飛降と憾悔げんおまつ志しな

中書
随流

み及端み何なし若わ御時ごの身
衣いあまま乃の外げ月げつ朔しやく日
家宿けの八はち分ぶん款くわんをを容よう時
ちよちらら河からら川せんのの音ねんん
折せよよおお新しん田でん堀ぼりのの舞まをを舞ま
いいそそおおひひささくくいいをを志し
晨明しんのの入い場じやうのの加か城じやうよよききん
来きああつつふふままううままのの吹ふきき

冬

上

廿三

子卯やと行ふ契の年寄
尾上はくのみ余所か
之砂の日浦舟と竹筒
月影流るもはなむら貴
巻乃目見口三の星と
夜もちうあさんかん
星よまへ海ふ水は
一宵物乃屋まや
け交の御供志んせん
多知よあまの鳥
気概うらもは
花山の院のむれあを
まは風うらみの
平庭のあまご

色好む冠を
神事なまぬ胸の
さり椿鬼をな
河原室乃上れ
雲井にほ
天物う
牛若よた
髪うく
人形も
水車は
字居橋の
名宗も
い
物く

初らほきそ飯のりいれ兼里
 雪を志すたまはあきやう也
 冬をうぬぬはあきのまらわ
 世のほあまふちあふ白髪
 数申れ福祿をよき志めて
 此らよふらあふさく里を子
 さくばや志あかふれた形
 皆あふれ山と申れ海は
 一系乃法も二流よあふり
 平海毎にの月本末を月
 いなるれう末生い前此船人の秋
 迹懐懐回うはらう写なを
 句はまはあめつと記交卷に
 うしろれ扱加むむ床際

閑居宅初雷をききはるり
 走いふすはの浦あふまき
 中井れ名とまきと乃名のは
 船をまきとまきと乃名のは
 御まに心まきとまきと乃名のは
 子て首途乃名のは知
 ねむそよむと清白の側
 けむいよあまは女まはは
 御布とれん志とまきはは
 血あふひそまきとまきと乃名のは
 鼻折うつらまきとまきと乃名のは
 新巻を起えまきとまきと乃名のは
 茶は居まきとまきと乃名のは
 好むいふれ茶省乃花

枯蓬菊をさくさく香も香く
河名不足よ君は来ませぬ
待たらんかたがはをれ
はる飯来れりよよの末
性う紀を拾南坊に北海野
天八行のせよこ物有これ
花分暮後には風はくは
みれく乃後法くしゆ

勢列
尾文氏
33
33

那云さきいたがわくたは
寝てても暑さむるも暑
短衣や酒のよみかき
くさ声よえりかき
一時ぬる子もばきき
茶をうり端乃山風の末
焼餅のありしてある好乃月
乞も楊枝と柳ちか

民
上
卅七

うらひなき。水北川を流す
くさしや聖なるありき
畏る時をちりやらあやう
たしこまきと名をわねぬ
木枕枕乃かたや藤花をらん
人にやうとてやうなまき
火を消すとてしじらるる
かふ鹿のあひつられあふ
大後かそけいなる風吹く
歩路なる小冷しし水
月独舞田の長橋をてふ
又三百丁もありけり
後どのも花をれ里かまき
かす籠をれしじらるる

送りては田の園やあむん
吹氣乃宗ありし風の風
をの中あむんの上風をれ
今年もなま火燈地なり
藤もまた家とてを内は流
男と玉流さく下おとこ
とら叶ふ急や今もらん
思ふを言にけりし此はあ
昔燦乃那ハ石垣を推し
空を空等れ寺記おぼし
賞券れり玉流の玉流らん
暁うをく簡簡を玉あり
将來と打録する月の下
をこのれをうかぬ乃林

子細くと継いそやも字人
名をかゝれも折れあし
三千九ひもそりて顔ごとく
又癩こそこそつりたり
云事やたきねせとてゆん
とそかとの中れおひ子
神といの佛といのりて
わけられくあきとれあう
長旅れたまひてさう万里
そ旅く一持と好風を吹
お摺り海のちあまゆん
常しく月張れおれ中
大橋を持とおれ花の陰
十人あまのりまをんはひ

五七

二句表ありとあしと水田よ
上をたれおそくもあまのり
氷のわ一町れ後合おとけ
さく波志と原日れ乃宿
風吹ら川を吹くそとつ山
秋人居るうも惜む枝葉
道れ祀も葉うけるは秋の風
はくひ秋りれ葉とては秋
冬あひ所のの月れあふ
今こそ我の胸うらむ人今もほ
ぬえも志のたねれそね夜
泣なほひのあまのあま
あまのあまはれ山かいつん
一云川にわこそく

五七

上

四十

其の流世に眼懸せんと
能く^原思ふそと奇れお
軍場らうのむう一の跡
知りれそそのひう衣
侍もそを結ふまのうと
あまのうかしのうの水
橋後のときまのうの夜
幾をつましく信れぬ

上原新
貞怒

其の花をよむ一及飛胡蝶
蛸乃果みよむと古柳此亦
門はあき帯おまのあきと
糸物も御よりく杖の枝
てり保月夜まむ毛纏
夕風礼場の鷹拂ひん
大名者おけあつくらん

坂の下のけりけり
八十郎も後を橋の筋を
水振離や腰裏一ひ丸裸
東方陣二世目おれ空
太刀先は空と照り天狗眞
空院冷一わりの過風
立向ら君を揚登れ集おとて
使は行くむ味はくのみ又
こまある刺ぬえに睦宗
とられおとすのこはゆ火
はをせおとや藤経は夕
彼をはらうのむり
たをねまふもさあね腰新
上十あるまもさられ行く

美盤のつらうも
通う町よりおすむ山の中
福あけけりぬえに大やうこ
美原のありはまや
糸りわふ多なる徳居も縁を
三盃のゆて思ひはれ
あふゆる万事にむむと計
後弟ひと内わらきり身
こもるれ夢に交あて
熊子よあをたもあ
ひあさるかよれ持の旅ん
女房事によやくやれ
あふりおるの月れ
たは熊持のわらむ

合種や白子とん様六家
 中野の野風をむき此雲
 農人此は風をきく名
 居室のすふ借るるなり
 月も又空の燈送り持
 子も降りておん神玉
 大徳と云ふお付れお
 ともやしれ鐘のちきり
 芝居よまふ分た守る
 夜も時ふあわいの山
 かくそ野中車お好い
 さよお枕よ月かこあ
 花も是れを藤の回念
 昔の一一は秋を去る

雪の吹去れたる夢ノ後
 天の網はくまを色
 けつりし藪の下道行
 惟やら先ん言隠乃内
 志のや紙端の清て
 宿をれ神紙むけ
 彼娘覚し寝さぬん
 裏よお終夜をちか
 三味線はあ 垣
 浪方よわふ尺八
 分りや尾花の神
 孫れきてくま
 子持加月の下宿
 浮世をいふ余布乃夕

ぼくはとうしほまはたわうく
 わいせこうりや老老今うこと
 編纂乃おのくゆき法法のた
 彼存さすれ記をひたさ
 抄糊本あるとや能く染染す
 免とくくもゆきも水楠
 ほほけす術海ほほらとく
 田植も種つ尻はあさうん
 斗方ぬ晴さくじふ月ぬ
 をいどちむ記本考うあうそ
 昔下信牌城あす南世何さ
 ういさり整の尻名衣手
 為る月允山産をまれ
 京自れ下かすむ法中

君の代や祖おまれ飯りあり
 流り級ぬはく牛こそそ石
 あくおぬのおう蚯蚓の穴は
 菊露の英さや知やあま虫
 草木え皆成伴の梅こみす
 少兒入端や足手水許
 かしきりりをも不奥の坊
 版を淋さりくすー 老老
 秋よさき火をぬかしの風
 後の置れまふたあま露
 水便と酒テの園も月さ
 せんごしやも調りあり
 と記すれ整表をて通さるれ
 意の守るるよ旅籠屋が

一里山乃ねりねり又遊(十)
 かなしくと堂をくらさ
 古の全登おへふ良の系
 穿入とてふ今いさのう
 寸先の署れは月いふ郭と
 ふかかりわり杖を下さ
 遠坂や花の身ゆり雨合羽
 去の湊や大津七浦

京本旧夢記文庫本
 序文 晩年

三井校

山本勘太郎

大和守日記 延享三年六月十二日

今日早野平ぬきおし。浪井山三郎を引て来。
山本勘太郎と名者行言よくするよし。

